

『源氏物語』において「あえか」という言葉が果たした役割

吉村 研一

「キーワード ①あえか ②にほひやか ③夕顔 ④女三宮

はじめに

『源氏物語』には人物の外見の容態を表現する様々な言葉が用いられている。「うつくし」、「うるはし」、「なまめかし」、「らうたし」、「をかし」、「いまめかし」、「あて」、「きよら」、「きよげ」、「わかやか」、「たをやか」、「はなやか」、「にほひやか」、「あえか」などが例として挙げられ、美という概念の王朝的意義といった面から様々な研究も成されてきた。本稿ではこれらの言葉の中で『源氏物語』以前には使用例の見出せない「あえか」という言葉に注目したい。「あえか」は、物語中において若い女性の一種独特の様相を表現しているが、なぜ『源氏物語』に使用されなければならなかったのか、「あえか」が物語内部において果たした役割とはどのようなものだったのか、について考察するものである。

一、「あえか」の用例

『源氏物語』において、「あえか」は十八例の用例^{注1}があり、『紫式部日記』にも三例の用例がある^{注2}。源氏成立以前の主要なかな文学作品といえは、韻文では『万葉集』、『古今和歌集』、『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』、散文では『竹取物語』、『伊勢物語』、『土佐日記』、『大和物語』、『平中物語』、『うつほ物語』、『蜻蛉日記』、『落窪物語』、『枕草子』が挙げられるが、各索引本を調べてもこれらの作品において「あえか」という言葉を見出すことはできない。前田富祺は「甦える古語―「あえか」の場合」^{注3}において、源氏以後の作品に「あえか」の使用例が多くなることに着目し、

『枕草子』では一例も使われていないのに、その四分の一ほどの語彙量しかない『紫式部日記』に三例も使われていることは偶然の結果とは思われない。「あえか」は『源氏

物語』と『紫式部日記』とに突然使われるようになったかに見える。「あえか」は紫式部の愛用語だったかと思われるのである。

と述べているが、少なくともこの時代に遍く日常的には用いられていなかった言葉を、『源氏物語』が物語内に少なからず取り込んだのだらうと思われる。

さてまず『源氏物語』に内在するこの「あえか」の意味について分析してみたい。全十八例の用例を本稿では便宜上以下の①～⑤のように五種類に分別して考察してみる。この十八例はすべて女君の容態を表現する言葉として用いられ、男君の容態に用いられる例はない。

① 自然物の様子に喩えて女の容態を表現（全一例）

この一例は兩世の品定めにおける、左馬頭の体験談中に用いられる。

ア 「(前略) 御心のままに折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉笹の上の霰などの、艶にあえかなるすきずきしさのみこそをかしく思さるらめ、いま、さりとも七年あまりがほどに思し知りはべなむ。なにがしがいやしき諫めにて、すきたわらむ女に心おかせたまへ。(後略)」

* (簾木 八〇頁)

* 『源氏物語』の引用は『新編日本古典文学全集』(小学館)より。

ここでの「あえか」は、萩にかかる露が手折れば落ちてしまふいそうな様子、笹の葉の上の霰が手を触れれば消えてしまふよ

うな様子のように、はかなく危なっかしい様子を表現している。ただし左馬頭は、そのような艶っぽく「あえか」な風流事は趣があるように見えるが、実は用心しなければいけないと言っているのである。七年も経てば分かるでしょうが、「すきたわらむ」女との恋には気を付けなさいと、まだ世間知らずの若い光源氏に注意しているのである。この「すきたわらむ」とは「色っぽくしなやかに曲がる」という意味であるが、「艶にあえかなるすきずきしさ」と重なっていることは間違いないであろう。よって、この「あえか」は直接的には「露や霰の触れれば落ちるようなさま」を表現しているが、実はそういった恋、さらにはそういった女の比喩として用いられていることが分かり、間接的に「女の容態」を表現している。

② 明石の姫君の幼さゆえの壊れそうな様子（全三例）

イ (紫の上) 「このをりに添へたてまつりたまへ。まだいとあえかなるほどもうしろめたきに、さぶらふ人としても、若々しきのみこそ多かれ。(後略)」 (藤裏葉 四四九)

これは入内する明石の姫君がまだ十一歳と幼く、その幼さゆえの壊れそうな様子を、紫の上が心配してその後見役に明石の君を付き添わせた方がいいと意見する場面。

ウ まだいとあえかなる御ほどに、いとゆゆしくぞ誰も誰も思すらむかし。(若菜上 八六)

エ まだいとあえかなる御ほどにいかにおはせむとかねて思し騒ぐに、二月ばかりより、あやしく御気色かはりてなやみたまふに御心ども騒ぐべし。(若菜上 一〇三)

ウ、エは、いずれも懐妊した明石の姫君がまだたいそう幼すぎるので（ウは十二歳、エは十三歳）、周囲の皆がその出産がどうなることかと心配している場面である。よってここでの三例の「あえか」とも、明石の姫君が女として発散する容態を表現しているわけではない。直面している大事に耐えうるには、明石の姫君があまりに年少であり、周囲の者が危なっかしいと見ているのである。明石の姫君が「あえか」な女君ということではない。

③ 紫の上が病に落ちて衰弱した様子（全一例）

オ いたうわづらひたまひし御心地の後、いとあつしくなりたまひて、（中略）年月重なれば、頼もしげなく、いとどあえかになりまさりたまへるを、院（源氏）の思ほし嘆くと限りなし。（御法四九三）

これは紫の上が通常の状態ではなく、重い病に落ちての衰弱ぶりを描写してのものである。この年の八月に紫の上は亡くなるのであり、この「あえか」はまさに回復の見込みのない弱々しさを強調したものであり、これも紫の上の本来の容態が「あえか」ということではない。

④ 否定形での表現（全二例）

カ 世の中をまだ思ひ知らぬほどよりはさればみたる方にて、あえかにも思ひまどはず。（空蟬 一二五）

キ ささやかにあえかになどはあらで、よきほどになりあひたる心地したまへるを、（宿木 四〇五）

カは軒端萩がいきなり源氏と契るようなことになっても、

「あえかに」うろたえることはなかった、という源氏の印象であり、キは匂宮の妻となった六の君の様相が、小さく「あえか」ではなくて、女っぽく成熟していると匂宮が思う場面である。カの「あえか」は精神的な弱々しさを表している、軒端萩はそうではなかったと否定している。またキの「あえか」は肉体的にきゃしゃな様子を表現していて、六の君はやはりそうではなかったことを描写している。これらのようにこの二人の女君が「あえか」ではないとわざわざ否定形で述べられていることは注意してよく、特にカの軒端萩の否定形については特別な意味を持つているとも考えられ、これに関しては後述する。

⑤ 女として発散する容態を表現（全十一例）

この十一例はすべて女君が幼少でもなく、重い病に患っている状態でもなく、平常時において「あえか」なる描写がとられているケースである。いわば女君が女として発散させている「あえか」さである。それが本来備わっている「あえか」なのか、偽りの「あえか」なのかは別として、少なくともそのような語られている女君が物語中に五人登場する。以下に女君とその用例数を巻順に書き出す。

夕顔 二例

秋好中宮 二例

女三宮 四例

落葉の宮 一例

大君 二例

これら五人の「あえか」ぶりについては、章を改めて次章で

考察する。

二、五人の女君達の「あえか」ぶり、及び対比される女君

【夕顔】

ク 白き裕、薄色のなよやかなるを重ねて、はなやかならぬ姿らうたげにあえかなる心ちして、そこととりたててすくれたることもなければ、細やかにたをたとして、ものうち言ひたるけはひあな心苦しと、ただいとらうたく見ゆ。

(夕顔一五七)

これは源氏が夕顔を見た印象が述べられている。その有様は、「はなやか」ではなく、「らうたげ」で「細やか」で「たをたを」として、ものを言う気配も痛々しいというもの。そのような夕顔を源氏は「あえか」に感じられて、たいそう可愛らしく、いじらしく思ったと語られている。「はなやかならぬ」と否定形になっているように、「あえか」は「はなやか」とは対蹠的に、「らうたげ」、「細やか」、「たをたを」とは重ね合わせて用いられている。

ケ (源氏) 「年齢は幾つにかものしたまひし。あやしく世の人に似ず、あえかに見えたまひしも、かく長かるまじくてなりけり」

(夕顔 一八七)

これは夕顔が亡くなった後に、夕顔の身近に仕えていた右近に対して源氏が夕顔の年齢を尋ねる場面である。ここでは「あやしく」、「世の人に似ず」が「あえか」と重ねられて使用され、

そういった記憶とともに「あえか」だった夕顔の様子が源氏に蘇ってくるのである。そして短命だったことも「あえか」なる夕顔の運命だと源氏は思い巡らす。源氏にとって夕顔とはいじらしくも可愛くもはかない女性だったのである。夕顔が死んだ年は十九歳だった。

ただし、断っておくが、本稿は決してこの「あえか」ぶりを捉えて女君たちの本質を分析しようとしたり、その人物造型に立ち入って作品全体の人間関係までを論じようとするものではない。あくまでも「あえか」という言葉に視点を定めて、その概念を確認して、「あえか」という言葉が物語内でどのような役割を果たしたかについて考察するものである。夕顔にしてもその性格はさまざま角度から研究され、「純粹無垢、従順、無邪気、自我がなく受動的」といった主体性の弱いタイプと位置付ける側と、^{注4}今井源衛のように「一見彼女(夕顔)はナイーブにも無心にも見えたけれども、その心の奥には、三位中将の遺児という誇りの為であろうか、その理由はともかくも、一人の女の意気地、あるいはしたたかな心の張りがあった」と強い自己があったと分析する側が^{注6}あり、^{注5}いまだにどちらとも定まっていはいないし、本稿はそういった議論には立ち入らない。本稿が取り上げるのは、あくまでも源氏の目に映る夕顔の容態が「あえか」であったと語られていることなのである。

さて、ここで夕顔の容態と対比されるべきが当時源氏の正妻であった葵の上である。葵の上も夕霧を産んで間もなく二十六歳で亡くなった。しかしながら葵の上には「あえか」という表

現は一切とられていない。源氏としても葵の上にはそのような印象を全く抱いていない。葵の上の容態を示した本文を引用してみよう。「あえか」という語を含まない引用文は英字を付す。

a 人のけはひも、けざやかに気高く、乱れたるところまじらず、(中略) あまりうるはしき御ありさまの、とけがたく

恥づかしげに(源氏ハ) 思ひしづまりたまへるを、

(箒木 九一)

b 絵に描きたるものの姫君のやうにしすゑられて、うちみじろきたまふこともかたく、うるはしうてものしたまへば、

(中略) 後目に見おこせたまへるまみ、いと恥づかしげに、

気高ううつくしげなる御容貌なり。(若紫 二二六―七)

c 四年ばかりがこのかみにおはすれば、うちすぐし恥づかしげに、盛りにととのほりて(源氏ハ) 見えたまふ。

(紅葉賀 三三三)

その容態は「けざやか」で「気高く」で、「乱れたるところ」もなく、「うるはしく」(端正、端嚴な様子)、^洋「ととのほり」でいて、絵に描かれた姫君のようであったという。いずれも「あえか」とは重ならない、対蹠的と思われる形容である。そしてこのa b c三例に共通していることは、源氏にとつて四歳年上の葵の上は「恥づかしげ」な存在であったことが強調されているということだ。つまり源氏が気おくれするような立派な存在であり、「あえか」に映った夕顔とは異質な容態に描かれている。

【秋好中宮(梅壺女御)】

同じように年上の女君でも冷泉帝が受けた秋好中宮の印象は葵の上とは全く違うものである。コは入内してきた秋好に初めて冷泉帝が会う場面である。

コ 人知れず、大人は恥づかしうやあらむと(冷泉帝ハ) 思しけるを、いたう夜更けて(秋好ハ) 参上りたまへり、いとつつましげにおほどかにて、ささやかにあえかなるけはひのしたまへれば、いとをかしと思しけり。

(絵合 三七三)

冷泉帝は秋好が九歳も年上であり、さぞやこちらが恥づかしくなるような立派で堅苦しい存在ではないかと思っていたが、そうではなく、「あえか」な感じであったので、たいそう好ましく映ったという。ここで「あえか」と重なる言葉は「つつましげ」、「おほどか」、「ささ(細)やか」で、「あえか」の概念を形成している。

また、源氏も恋情を抱き、危うく手を出しそうになった秋好中宮であったが、

サ (源氏) 「あやしくあえかにおはする宮なり、女どちは、もの恐ろしく思しぬべかりつる夜のさまなれば、げにおろかなりとも思いてむ」

(野分 二七五)

と、源氏からも、「あやし」く「あえか」な女として見られていたことが語られ、「あやし」という言葉が「あえか」と重ねられて用いられている。

一方、冷泉帝から見て、秋好中宮と比較されるのが、秋好よ

り二年前に入内していた左大臣家の弘徽殿女御である。入内当時弘徽殿女御十二歳、冷泉帝十一歳で、年齢が近いこともあり、気兼ねなく親しくしていたが、その弘徽殿女御が成長して一九歳になったときの容態は、

d この御ありさまはこまかにをかしげさはなくて、いとあてに澄みたるものの、なつかしきさま添ひて、おもしろき梅の花の開けさしたる朝ぼらけおぼえて、残り多かりげにほほ笑みたまへるぞ、人にことなりけると(父・内大臣ハ)見たてまつりたまふ。(常夏 二四二)

とあるように、こまやかな美しさはないが、気品が高くて、「すつきり」としていて、それでいて「優しく親しみやすい」といったタイプで、「あえか」で表現される秋好とはまた異なった容態に描き分けられている。

【女三宮】

女三宮こそ「あえか」が最も似合う女性かもしれない。藤田加代は「あえか」を女三宮造型上の重要な言葉として位置付け、この言葉が、「状況に流され、抗するべくもなく蹂躪され、懐妊し、密事が露頭し、ただ恐れ怯え、やがて壊れてゆく彼女の生の形を見事に刻み出す」と分析する。女三宮には、以下に挙げるシ、ス、セ、ソの四例という他の女君と比べて最も多い用例を見出すことができる。

シ 女宮は、いとらうたげに幼きさまにて、御しつらひなどのことごとしく、よだけく、うるはしきに、みづからは何心

もなくものはかなき御ほどにて、いと御衣がちに、身もな
くあえかなり。(若菜上七三)

このときはまだ六条院に降嫁してきたばかりでもあり、幼さゆえのいたしかたない「あえか」ぶり、だと解釈してはいけない。前述したが、明石の姫君が十二歳という幼さで懐妊したことを、周囲の者たちがまだいと「あえか」なので危なっかしいと表現したその「あえか」とは本質的に異なるのである。分かりやすく比較すると、当時の明石の姫君の懐妊は「幼すぎて痛々しい」のであり、このときの女三宮は「痛々しいまでに幼稚」なのである。まず、すでに十四〜五歳であり、当時の女性としては、結婚するのに十分な年齢である。そして女君としてそれなりのわかまえを持つていてしかるべき皇女という身分柄でもある。しかしながら、六条院に降嫁してきた女三宮の部屋は「ことごとしく(仰々しく)、「よだけく(ものものしく)、「うるはしく(端正、端厳)しつらえてあるのに、そこに入る女三宮が「らうたげ」に「幼きさま」で、「何心もなく」、「ものはかなき(頼りない)様子で、御衣に埋もれてしまうように「身もなし(きゃしゃ)」と、その「あえか」ぶりを描写している。部屋の立派な様子と女三宮の「あえか」さが対比されるという独特の表現になっている。この対比から、言葉としては「ことごとし」、「よだけし」、「うるはし」が「あえか」とは対蹠的に用いられ、「ものはかなし」、「身もなし」などが重ねられて使用されていることが理解できる。また、以下のス、セは女三宮が二十一〜二歳という女盛りともいうべき年齢の容態

である。

ス 二十一二ばかりになりたまへど、なほいといみじく片なり
にきびはなる心地して、細くあえかにうつくしくのみ見え
たまふ。

(若菜下一八四)

セ 宮の御方を(源氏ガ)のぞきたまへれば、人よりけに小さ
くうつくしげにて、ただ御衣のみある心地す。にほひやか
なる方は後れて、ただいとあてやかにをかしく、二月の中
の十日ばかりの青柳のわづかにしだりはじめたらむ心地し
て、鶯の羽風にも乱れぬべくあえかに見えたまふ。

(若菜下一九一)

スもセも源氏が女三宮を見た印象が描かれている。スはこの
年齢でありながら未成熟な女君を気にかける源氏の心情が描き
出されるが、「片なり」、「きびは」(幼少)、「細く」(瘦せていて)
が「あえか」と重ねられていて、それでも「うつくしく」(可
愛らしく)源氏に映っていることを見逃してはならない。

セは源氏が女性美という観点から、女三宮の容態を明石の女
御と紫の上と比較する場面である。女三宮は小さくて可愛いが、
「にほひやか」ではなく、気品があつて「をかしく」て「あえか」
であると表現している。その「あえか」ぶりを二月中旬の青柳
の枝の垂れはじめた様子に喩え、鶯のかすかな羽音にさえ心が
乱れてしまうような弱々しさだと語られている。一方、明石の
女御は「同じやうなる御なまめき姿のいますこしにほひ加わり
て」(若菜下 一九二)と、女三宮よりは少し「にほひやか」
と表現され、藤の花に喩えられている。紫の上に至っては「大

きさなどよきほどに様体あらまほしく、あたりににほひ満ちた
る心地して」(若菜下 一九二)と、「にほひやか」さがあたり
一面に満ちているように感じられて、花に喩えるなら桜よりも
さらにすぐれている、と称えられている。これらの表現から、
「あえか」なる女には「にほひ」(映発するようなつややかさ、
光沢をおびた華麗美^{注10})がなく、「あえか」の対蹠語として、「に
ほひやか」という言葉が浮かび上がる。

また、ソは柏木との密通の後の源氏から見た女三宮の様相で
ある。

ソ 院(源氏)は、心憂しと思ひきこえたまふ方こそあれ、い

とらうたげにあえかなるさまして、かくなやみわたりたま
ふを、いかにおはせむと嘆かしくて、さまざまに思し嘆く。

(若菜下 二六六)

このときの女三宮は、柏木との密通が露見したことによる心
労が重なつていて、痛々しいとも見るべきである。源氏は密通
については心憂しと思ひながらも、一方では、その「とらうたげ」
で「あえか」な様子を見るにつけても女三宮に憎悪を抱くこと
ができない。ここでは「とらうたげ」が「あえか」と重なつて用
いられ、源氏の心情に強く訴えかけている。

【落葉の宮】

夕は夕霧が突然に小野を訪問し、障子の隙間から落葉の宮の
様子を垣間見る場面である。

夕 人の御ありさまの、なつかしうあてになまめいたまへるこ

と、さはいえどことに見ゆ。世とともにものを思ひたまふ

けにや、瘦せ瘦せにあえかなる心地して（夕霧 四〇七）

夕霧にとつて、初めて見た落葉の宮は、「あて」（気品があり）で、「なまめい」（優雅で）ていて、想像していたよりは美しく思われた。と同時に、瘦せてはっそりとしていて「あえか」に感じられたという。「瘦せ瘦せ」が「あえか」と重ねられている。この「あえか」さは夕霧の正妻である雲居雁と比較されている。

e 上（雲居雁）も御殿油近く取り寄せさせたまで、耳はさみしてそそくりつくるひて、抱きてあたまへり。いとよく肥えて、つぶつぶとをかしげなる胸をあけて乳などくくめたまふ。
（④横笛 三六〇）

夕霧の妻として子供たちの育児にあたり、家事をこなすといった、所帯じみではいるが生き生きと、生活力に溢れた雲居雁の様子が描かれている。「よく肥えて」、「つぶつぶとをかしげなる胸」が落葉の宮の「あえか」と対蹠的な容態を表現している。また一方では、

f さすがに、この文の色気なくをこつり取らむの心にて、（夕霧ガ）あざむき申したまへば、（雲居雁ハ）いとにほひやかにうち笑ひて、
（④夕霧 四二九）

g （雲居雁ハ）いみじう愛敬づきて、にほひやかにうち赤みたまへる顔いとをかしげなり。
（④夕霧 四七三）

と表現され、「にほひやか」なる雲居雁の様相が描写される。前述したように「にほひやか」は「あえか」とは対蹠的に用いられている言葉である。落葉の宮はこのような雲居雁とは異質

な女の趣であり、夕霧にとつて新鮮に映ったことは間違いない。森藤侃子が「雲居雁にとつての不幸は、夫が彼女にとつてないものねだりするに等しい、しめやかな情緒と、ものほかない侘住居の女二の宮に惹かれた事にある」と指摘するが音ごとくである。落葉の宮の「あえか」さは、まめびと夕霧の恋心を十分に刺激するものであった。

【宇治の大君】

チ（弁の尼）「前略」もとより、人に似たまはずあえかにおはします中に、この宮の御事出で来にし後、いとどのもの思したるさまにて、はかなき御くだものだに御覧じ入れざりしつものにや、（後略）」
（総角 三一六）

ツ いとどなよなよとあえかにて臥したまへるを、むなく見なして、いかなる心地せむと、胸もひしげて（薫ハ）おほゆ。
（総角 三二八）

チ、ツともに臥しているときの大君の「あえか」な容態である。チでは、大君は病気になつて臥す前からもとより「あえか」であつたと、弁の尼は薫に言っている。ツでは臥している大君を目の当たりにして、その「あえか」さに胸が張り裂けそうになる薫の心境を表現している。「人に似たまはず」、「なよなよと」が「あえか」と重なる言葉である。

ここでも大君の「あえか」さは妹である中の君と比較されるべきである。薫は中の君を恋の対象に選んでもおかしくはなかつた。以下は薫が姫君たちの姿を初めて垣間見た場面である。

h (中の君)「扇ならで、これしても月はまねきつべかりけり」

とて、さしのぞきたる顔、いみじくうたげにほひやかにるべし。添ひ臥したる人は、琴の上にかたぶきかかりて、(大君)「入る日をかへす撥こそありけれ、さま異にも思ひおよびたまふ御心かな」とて、うち笑ひたるけはひ、いますこし重りかによしづきたり。(橋姫 一三九)

中の君は「にほひやか」で大層可愛らしい。大君は中の君よりは重々しく深い心づかいがあると、月の光の下、おぼろげながらも薫はそう感じている。しかしながらこの垣間見では薫が何故に大君の方を中の君より好ましく評価したのが今ひとつ判然としない。女性としての魅力はむしろ「らうたげ」で「にほひやか」な中の君の方が勝っているように描かれる。二人の姫君に対する薫の印象がはっきりと本文に表現されているのはこの垣間見から二年も経た夏のことであつた。それは明るい陽射しのもとでの強烈な印象であつた。

中の君に対する印象

i いとそびやかに様体をかしげなる人の、髪、袿にすこし足らぬほどならむと見えて、末まで塵のまよひなく、艶々とこちたううつくしげなり。かたはらめなど、あならうたげと見えて、にほひやかにやはらかにおほどきたるけはひ、女一の宮もかうさまにぞおはすべきと、ほの見たてまつりしも思ひくらべられて、うち嘆かる。

(椎本 二一七―八)

大君に対する印象

j 「かの障子はあらはにもこそあれ」と見おこせたまへる用意、うちとけたらぬさまして、よしあらんとおほゆ。頭つき、髪さしのほど、いますこし(中の君ヨリハ)あてになまめかしさまさりたり。(中略)黒き袷一襲、おなじやうなる色あひを着たまへれど、これはなつかしうなまめきて、あはれげに心苦しうおほゆ。A髪さはらかなるほどに落ちたるなるべし、末すこし細りて、色なりとかいふめる翡翠だちていとをかしげに、糸をよりかけたるやうなり。紫の紙に書きたる経を片手に持ちたまへる手つき、かれ(中の君)よりも細さまさりて、痩せ痩せなるべし。

(椎本 二一八)

中の君の髪は「艶々」と豊満で「うつくしげ」である。横顔はまことに「らうたげ」で、「にほひやか」で「やはらかにおほどきたる」様子は女一宮とも思い比べられて、ため息を漏らさざるを得ない。一方、大君は用心深い様子で、思慮深く見える。頭や髪のかたちは中の君よりは「あて」で「なまめかし」。そして、中の君と同じような色合いの喪服を着ているが、「なつかし」う「なまめき」で、薫の心に何ともいえない胸が締めつけられるような気持ちが生じてくるのである。さらに傍線部Aであるが、髪の量は豊満ではなくむしろ抜け落ちていて先端が細く痩せている。それでありながら、いと「をかしげ」と薫には映っている。手つきも中の君よりも細々としていて、痩せて弱々しい。これらの描写こそ、まさに弁の尼に前記チで

「もとより、人に似たまはずあえかにおはします」と言わせしめた大君の実態なのであろう。

中の君の外見的な女性美ははるかに大君を上回っているように映る。しかしながら薫は気高く気品はあるものの、その痛々しく弱々しくもきゃしゃな大君の容態に強く惹かれているのである。

三、「あえか」の概念と「あえか」なる女のモデル

さて『源氏物語』には数多くの女君が登場して、様々なタイプに語り分けられているが、その一つの弁別方法として、容態が「あえか」であるか否かによっても対比されていることを述べてきた。すなわち、源氏の青年時代であれば夕顔と葵の上、冷泉帝の妃としては秋好中宮と弘徽殿女御、六条院の女主人としては女三宮と紫の上、夕霧の妻としては落葉の宮と雲居雁、そして薫の恋人としての宇治の大君と中の君である。ここで「あえか」という言葉の表現する概念をより明白にするために、前章で拾い出した「あえか」と重ねられて用いられている主な語句を、使用された女君ごとに整理してみる。(重複する語あり)

夕顔

「はなやかならぬ」「らうたげ」「こまやか」「たをたを」「あやし」「世の人に似ず」

秋好中宮

「つつましげ」「ささ(細)やか」「あやし」「らうたげ」「幼きさま」「何心なし」「ものはかなし」「身もなし」「片なり」「きびは」「細し」「小

女三宮

さし」「うつくし」「柳のわづかにしだ(垂)り

はじめたらむ」「鶯の羽風にも乱れぬ」

落葉の宮 「痩せ痩せ」

宇治の大君「人に似ず」「なよなよ」「痩せ痩せ」

それぞれの女君によって、微妙に異なる「あえか」さではあるが、いずれも生命力の弱さ、女のか弱さを感じられる語句である。しかしそれでいて、切なくも妖しい魅力を秘めているようにも感じられる。一方それぞれの「あえか」に近接し、否定形もしくは対比的に用いられている対蹠語は、「はなやか」、「ほひやか」、「うるはし」、「ことごとし」、「よだけし」などが挙げられ、特に「にほひやか」(映発するようなつややかさ、光沢をおびた華麗美)と「うるはし」(端正、端嚴であること)は、「あえか」なる女君と対比される女君たちの描写に多く用いられている。以上から「あえか」の表現する概念をまとめると、一言で言い表すことは困難であるが、おおむね「か弱く、なよなよとして、きゃしゃで、はかなげで美しい、そういう女性の様子」といったことになろうかと思う。

さて、ところで、このような「あえか」なる女君が物語制作の初期の段階から構想にあったかどうかは疑問である。「あえか」なる女を物語に登場させようとしたきっかけは、『紫式部日記』に描かれているある人物との出会いにあったと思われるからである。そしてその時期は物語がある程度書き進められた第一部の途中の段階であったと想定したのである。前述したように前田富祺によると、「あえか」は『源氏物語』と『紫式

部日記』とに突然使われるようになり、紫式部の愛用語だった旨が論じられているが、「あえか」という概念は式部の出仕後に発想され、徐々に凝結していったものではなからうか。『紫式部日記』において象徴的な「あえか」なる人物が一人登場するのである。少少将の君である。

少少将の君は、そこはかとなくあてになまめかしう、二月ばかりのしだり柳のさましたり。様態いとうつくしげに、もてなし心にくく、心ばへなども、わが心とは思ひとるかたもなきやうにものづつみをし、いと世を恥ぢらひ、あまり見ぐるしきまで罵めいたり。腹ぎたなき人、悪しざまにもてなししいひつくる人あらば、やがてそれに思ひ入りて、身をも失ひつべく、あえかにわりなきところついたまへるぞ、あまりうしろめたげなる。

（新編日本古典文学全集『紫式部日記』一九〇頁）

少少将の君とは式部と同様に中宮彰子に仕えていた女房で、源雅信の子である右少弁時通の娘であり、かつ道長室倫子の姪である。少少将の君は傍線部のように「二月ばかりのしだり柳のさましたり」と描写される。前述したように女三宮を形容する表現と同じであり、藤田加代も「少少将の君を、女三宮の部分的モデルと見てもよからうと思う」と述べている。少少将の君はとても可愛らしいけれど、内気で恥ぢずかしがりやで、子供っぽくて、変な噂でも立たたものなら、気に病んで、死ん

でしまいそうなほど弱々しいと、その「あえか」ぶりを式部は心配している。が、この少少将の君こそ、宮中において式部と最も親交のあった女君であり、式部の少少将の君に対する厚情は、里帰りした少少将の君との和歌のやりとりからも十分に窺うことができる。そして、式部は宮仕えして少少将の君と親密に接しているうちに、こういう「あえか」な女君が男君から特別の感情を抱かれることを感じ取ったのではないだろうか。そして、制作中の物語の中に、このような「あえか」な女君が登場させる構想を抱いたのではないだろうか。宮中に出仕して少少将の君と出会うまでは、夕顔を始めとする「あえか」なる五人の女君についての構想はなかったのかとも思われる。ここで、二章において抜き出した、「あえか」なる女君の登場を巻順に並べてみる。

①夕顔（夕顔）巻 ↓ ②秋好中宮（総合）巻 ↓ ③女三宮（若菜上）巻 ↓ ④落葉の宮（夕霧）巻 ↓ ⑤宇治の大君（総角）巻

単なる初登場の巻という意味ではなく、その容態が「あえか」という語を伴って初登場する巻のことである。また、「あえか」という言葉自体の巻順における初出は帚木巻の「艶にあえかなるすきずきしさ」（秋にかかる露や笹の葉の上の霰のようなほかない情緒）である。確かに巻順でいえば、「帚木」巻、「夕顔」巻といった早い順番の巻から「あえか」という言葉も「あえか」なる女君も登場することになるが、武田宗俊の指摘するように物語が紫上系と玉鬘系に分けられていて、紫上系から成立した

ことを首肯するのであれば、「あえか」なる女君の登場は「総合」巻の秋好中宮が初出となり、「あえか」という言葉も秋好中宮の描写に用いられた「総合」巻が初出となる。つまり、紫上系の「桐壺」巻から「滯標」巻までの十巻には一切「あえか」なる女君も「あえか」という言葉も出現しないことになる。これは、紫上系に数多の女君が登場し、かつ数多の女性を形容する語句が使用されることを踏まえると、あまりに遅すぎる出現であり、制作当初の段階では「あえか」という概念が作者の構想にはなかつたと考えるのが妥当だと思われるのである。『源氏物語』は式部の宮中出仕前にとこまで書かれていたかについて定説はないが、第一部の途中あたりから宮中出仕後に書かれたとする説に従えば、このことを裏付けることにもなる。つまり秋好中宮が「あえか」さを伴って登場する総合巻を制作したのは、式部が宮中に出仕して小少将の君と出会った以降であり、「あえか」なる女君を物語中に取り込んだきつかけは小少将の君の存在にあったと考えて矛盾が生じないことになるのである。そして「あえか」という言葉自体が『源氏物語』以前の主要な文学作品に見当たらないことを踏まえると、式部が出仕した当時、狭い空間において流行っていた、いわゆる女房言葉の類だったのかもしれない。

四、「あえか」の果たした役割

「あえか」なる言葉があつてはじめて「あえか」なる女とそうでない女の差異が明確に弁別できる。「あえか」なる女君の

容態が物語内で鮮やかに浮かび上がり享受者の概念として定着する。「あえか」という言葉は三章の枠内で示したように、単に「つつましげ」で「ささやか」で「ものはかなく」で「痩せ」で「人に似ず」に「なよなよ」としていればいいということではない。そのような女君に男君が接したおりに、「いじらしく」も「切なく」も「恋しい」という感情が湧き起こらなければならぬ。そこに『源氏物語』における「あえか」の本当の意味があると思われる。式部自体もそうであったのだろう。小少将の君を目の当たりにして、宮中に出仕するというそれなりの身分で、それなりの教養を有していても、世の人に似ず「あえか」な女君がいることを知った。そして、身近に接しているうちに、その「あえか」なる女君に特別な感情を抱き親友となった。式部は小少将の君の「あえか」さをいじらしくも慕わしいと感じたのであろう。

『紫式部日記』には中宮サロンの女房達の様子が描かれているが、宰相の君、宣旨の君、北野の三位の宰相の君など、「あて」で「にほひやか」であり、式部は「心耽つかしげ」であつたという。式部にとっては、気おくれするような風格の女房たちであつた。小少将の君はそのような有様とは異質の描かれ方で対比されている。また、他の女房たちの容態を描写する表現がありきたりであるのに比べて、「二月ばかりのしだり柳のさましたり」という表現などは、式部がいかに小少将の君の容態に特別な印象を持っていたかが分かるのである。このような女に対して男はどのような感情を抱くのであろう。「あえか」なる女

とは男心に特殊な感情を抱かせるはずだ、それを物語の中でテーマ化して取り上げてみたいと考えたのではないだろうか。換言すれば、作者は少少將の君を、自分の制作する物語空間に拉致してきて、男君達の中にもうり込んだのである。

物語の中の「あえか」な女君は、夕顔や落葉の宮、宇治の大君にしても、男君が正妻として迎える女というよりは、浮気の対象として男心がそえられるという役割を担って描かれている。また空蟬も源氏の浮気相手の女君として登場する。空蟬については「あえか」という直接の表現はないのであるが、既述したように対比される軒端萩に「あえかならず」とわざわざ否定形が用いられていることは重要で、空蟬は軒端萩とは逆の「あえか」なタイプであったことが窺われる。二人の囲碁を打つ姿を源氏が垣間見する場面があるが、「頭つき細やかに小さき人のものげなき姿ぞしたる、(中略)手つき瘦せ瘦せにて、いたうふき隠しためり」(空蟬 一一〇)と、その「あえか」な容態が目に映る。一方の軒端萩は「頭つき額つきものあざやかに、まみ、口つきいと愛敬づき、はなやかなる容貌なり」(空蟬 一一〇)と表現され、親が自慢するほどのはなやかな美人である。さらに空蟬は「にははしきところも見えず」(①空蟬 一二一)、軒端萩は「にはひ多く見えて」(空蟬 一二一)と「にはひ」の有無でも源氏には対蹠的に映る。しかしながらその「にはひやか」な軒端萩には源氏が興味をそられなかったこととで、「あえか」の持つ意味が強調されている。また秋好中宮や女三宮は身分も高く浮気の対象という描かれ方ではないが、

男君の恋心に火を付けて夢中にさせたことが語られる。秋好は九歳も年下の冷泉帝から深く愛されるが、朱雀院、源氏からも強い好き心を抱かれ、本望を遂げられなかった朱雀院の失意や源氏との危うい場面が描かれる。女三宮もその「あえか」な魅力を持ち合わせていなかったら果たして柏木との密通に至ったかどうか。柏木は「にはひやか」ならぬ「あえか」さゆえに女三宮との一線を越えてしまったのではないか。「いとさばかり気高う恥づかしげにはあらで、なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひ」(若菜下 一二五)という容態を目の当たりにしたときに、自分を抑えきれなかったと柏木は振り返る。また、薫は明るい陽射しの中ではつきりと大君の容態を認知し、その「あえか」さの虜になったのではないか。薫は大君と出会ってから最初の二年の間は、それほど強く大君をものにしようとしてはいない。積極的に大君に対して行動を起こし、強い恋情を訴え出すのは、この大君の「あえか」さを垣間見した「椎本」巻以後である。

本稿は決して「あえか」という言葉をもって、女君の人物造型の本質に立ち入り、物語中の人間関係までを分析しようという意図はない。ただし、「あえか」という言葉で女君の妖しい魅力を訴えて、男心をそそらせ、それが物語における一つの重要なドラマツルギーを担っていることを言及したのである。『源氏物語』は男から見てもこちらが「はづかしく」なるような「うるはし」く「はなやか」で「にはひやか」な女君たちを登場させ、男君たちの正妻や憧れの人として活躍させた。その

一方で、「痩せ瘦せ」で「なよなよ」として、「ものはかない」女君たちを描き出し男心に火を付けた。そして後者の女を「あえか」という言葉で記号化して読者の心に印象付けたのである。

おわりに

繰り返し返すが、「あえか」は源氏以前のかな文学作品には見出すことができない、いわゆる源氏初出語と考えられる言葉である。もちろん「あえか」という言葉自体は当時の社会に存在はしていたのであろう。しかしながらほぼ同時代の『枕草子』、『和泉式部日記』に見当たらないということは、相当狭い範囲でしか流通していない稀有の言葉であったことが窺える。その「あえか」なる言葉を『源氏物語』は物語内に取り入れ、その用例は一八例もの多くを数えた。おそらく享受者にとってこの「あえか」という言葉は最初は耳慣れないものであったはずである。物語は「あえか」を女君の容態を表現する言葉として活用したが、どのような女性の容態が「あえか」であるのか、「あえか」という概念もいきなりは分かりにくいものであったと思われる。それが、夕顔、秋好中宮、女三宮、落葉の宮、宇治の大君などの容態を表現する言葉として繰り返し使用され、「たをたを」、「細し」、「痩せ瘦せなり」、「なよなよ」となどと近接して同類語的に用いられ、さらに「はなやかなり」、「にほひやかなり」、「うるはし」などとは対蹠語的に用いられることによって、その概念が次第次第に享受者の頭の中で固まってきたと思われるのである。

言語学者ソシュールは、十九世紀後半に、当時としては独創的ともいえる記号理論を打ち出した。この理論は、きちんと区分され分類された事物や概念がまず存在して、それらに名称(コトバ)が与えられているのではなく、コトバがあつてはじめて概念が生まれる、という従来とは逆の発想である。『源氏物語』における「あえか」もまさにこの理論に合致するものではないか。つまり、「あえか」というコトバがあつてはじめて「あえか」の概念が創造されたとも思われるのである。

注

- 1 池田亀鑑『源氏物語大成』(中央公論社 一九八五年版)の索引(底本大島本)では十七例であるが、本稿で引用した「ツ」の用例を加えた。この用例は大島本以外の青表紙本系、河内本系、別本にも遍くとられている。
- 2 『平安日記文学総合語彙索引・西端幸雄他共編』(勉誠社、一九九六年)
- 3 前田富祺「甦える古語―「あえか」の場合」『国語語彙史の研究 十四』(一九九四年 和泉書院)
- 4 主な論は仲田庸幸『源氏物語の文芸的研究』(風間書房 一九六二年)、竹村義一『源氏物語女性像』(有精堂 一九七〇年)、増田繁夫『空蟬と夕顔』『源氏物語の探究』第五輯(風間書房 一九八〇年)など。
- 5 今井源衛「夕顔の性格」『源氏物語の思念』(笠間書院 一九八七年)

6 日向一雅は『源氏物語の王権と流離』（新典社 一九八九年）の「六、夕顔巻の方法」において「夕顔は男心への根源的な不信があり、源氏との間にも心の隔てがあった」旨の分析をしている。

7 ここでの「うるはし」は、犬塚亘「平安朝における「うるはし」の展開『論究日本文学』第五号（一九五六年六月 立命館大学日本文学会）において「端正端嚴といった面が、源氏物語の「うるはし」の意味するところ」との論を取る。

8 藤田加代「「あえか」のイメージ—女三宮の造型に関連して—」『高知女子大学保育短期大学部紀要』第14号（一九九〇年三月）

9 藤田加代「女三宮」造型を考える—「あえか」のイメージを中心に—『日本文学研究』第四十四号（高知日本文学研究会 二〇〇六年五月）

10 「「ほひ」の意味については吉澤義則「香ひの趣味」『源氏随攷』（晃文社 一九四二年）、三木幸信「かをる」と「にほふ」考』『平安文学研究』第四輯（一九五〇年七月）、犬塚安旦「匂ふ」「匂ひやか」「花やか」考』『平安文学研究』第十五輯（一九五四年六月）の論に従う。
森藤侃子「9女の宿世」『講座源氏物語の世界』（有斐閣 一九八〇年）

12 注9と同じ。

13 武田宗俊『源氏物語の研究』（岩波書店 一九五四年）

14 秋山虔は『新編日本古典文学全集・源氏物語①』（小学館 一九九四年）の解説「二紫式部とその時代」において、「冷泉帝の治世下、宮廷政治の領導者として一途に繁栄していく第十四帖「滯標」巻以後の物語の展開には、道長の栄華生活が反映しているとおぼしく、そのあたりからは紫式部の宮仕え以後の執筆かとする見解もいわれるのではないことではあるまい」と述べている。

15 山中裕は「源氏物語の成立年代に関する一考察」『国語と国文学』（東京大学研究室一九五一年九月号）において、「踏歌」と「行幸」という二つの行事をとり上げ、それぞれの行事についての描きぶりに著しい相違があるのは、作者が実際に見ないで書いたか見て書いたかの相違であると論じ、少なくとも藤裏葉巻は出仕後に書かれたものと結論づけている。

（よしむら・けんいち 二〇一四年博士後期課程修了）